

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏 名 上條 菜美子

学 位 博士 (心理学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
社会心理学	意味づけ, 反すう, ライフイベント, 語り, 心理尺度, 生活史	
主要担当授業科目	社会心理学, 心理学研究法, 心理学実験, 社会調査実習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1)		
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 筑波大学人間総合科学研究科 TF 優秀賞	2016年1月 29日	筑波大学人間学群心理学類の「臨床社会心理学」の授業において、「意味づけの臨床社会心理学」という題目で授業を実施した。受講生の授業評価アンケートにおいて、人間総合科学研究科心理学専攻内で最も高い評価を受け、TF 優秀賞を受賞した。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 筑波大学附属高等学校 心理学講習会講師 (2016年7月7日) 2) 高知県香美市 未来応援講座 講師 (2019年3月10日)		筑波大学付属高等学校において、「勉強と戦う君へ～No study No raju」というタイトルで約40分の講演を行った。 高知県香美市が主催する「未来応援講座」において、恋愛や結婚にまつわる悩みを当事者間で共有する座談会のファシリテーターとして講座を担当した。
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		

事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 1) 日本学術振興会特別研究員 DC1 2) 科学研究費研究活動スタート 支援	2014年4月 ～2017年3月 2017年9月～ 2019年3月	日本学術振興会の特別研究員に採用された。課題名：ストレスフルな体験に対する意味づけ過程の精緻化に関する基礎的研究 日本学術振興会の科学研究費研究活動スタート支援が採択された。課題名：ストレスフルな体験の意味づけに対するネットワーク的解釈とその臨床応用
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他 1) 平成28年度 日本カウンセリング学会独創研究－内山記念賞受賞	平成28年7月	筆者が日本カウンセリング学会に投稿した2014年度の論文の中で優秀な実証研究として学術的に高く評価され表彰された。

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) PTG その可能性 と課題	共著	2016年11月	金子書房	編著者：宅香菜子 PTG (Posttraumatic Growth: 心的外傷後成長) について、心理・社会・医学・看護領域など幅広い分野から PTG の研究と臨床実践の詳細がまとめられている。申請者は、「PTG と熟考・信念の揺さぶり」と題したコラム (2000 字程度) を執筆した。
(学術論文) 1) 大学生アスリー トの 試合満足度評価 －制御焦点と競技不安 に着目して－	共著	2013年2月	筑波大学心理学研究, 45, 39-47.	共著：上條菜美子・湯川進太郎 アスリートの競技パフォーマンスに対する満足度と、制御焦点ならびに競技不安との関係性について検討した。その結果、促進焦点と防止焦点の両方の動機づけが高いことが、競技不安を低くし、試合に対する満足感を高めることが示された。ここ

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
2) ストレスフルな出来事に対する主観的評価と意味づけ動機：場面想定法を用いた基礎的検討	共著	2014年8月	カウンセリング研究, 47, 137-146.	<p>から、アスリートが抱く「勝ちたい」や「負けたくない」という動機づけが自主的な努力行動を促し、競技不安が低くなることで、アスリートは試合本番でも満足のいくプレーをしやすくなると推察される。</p> <p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>ストレスフルな体験に対する主観的評価が、意味づけ動機に対しどのような影響を及ぼすのかについて、物語性を持つ多様な出来事を用いた場面想定法により検討した。その結果、未然防止性、生起可能性、不快感が高いとき、意味づけ動機が高くなることが示唆された。さらに、出来事に対する脅威を高く評価するほど、自己の変化に対する予測が高くなることが分かった。</p>
3) ストレスフルな体験の反すうと意味づけ —主観的評価と個人特性の影響—	共著	2015年1月	心理学研究, 85, 445-454.	<p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>ストレスフルな体験に対する意味づけおよび反すうを規定する要因を検討するため、物語性を持った6つの仮想場面を用いた場面想定法による調査を行った。その結果、ストレスフルな体験に対する脅威評価は意味づけを抑制するが、反すうを介することで、意味づけが促進されることが示された。また、実行機能および思考スタイルなど、反すうと意味づけに影響を及ぼす要因が一部明らかになった。</p>
4) ストレスフルな体験の意味づけにおける侵入的熟考と意図的熟考の役割	共著	2016年2月	心理学研究, 86, 513-523.	<p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>意味づけ過程における侵入的熟考および意図的熟考の機能について検討するため、回顧法による質問紙調査を実施した。その結果、体験当時に意図的熟考をするこ</p>

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
5) ストレスフルな体験の意味づけにおける感情 —出来事の種類のふまえて—	共著	2016年2月	カウンセリング研究, 49, 11-21.	<p>とで、成長感につながる肯定的な意味が生成されやすく、一定の時間が経過しても侵入的熟考が高い場合は、否定的な意味生成が促されることが示された。また、体験当時の意図的熟考は、ポジティブな意味の生成だけでなく、その後（調査時点）の侵入的熟考に結びつきやすいことも示された。</p> <p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>ストレスフルな体験の後に生起するネガティブ感情が意味づけ過程に及ぼす影響と、その意味づけ過程がストレスフルな出来事の種類によって異なるかを検討するため、場面想定法による質問紙調査を実施した。その結果、出来事の種類によって変数間の関連の強さは異なるが、全出来事に共通して、(1) 後悔などの悔恨感情から意図的熟考、意図的熟考から意味づけに正のパス、(2) 絶望などの落胆感情から脅威評価、脅威評価から侵入的熟考に正のパスが確認された。</p>
6) ストレスフルな体験の意味づけに関する質的検討	共著	2016年3月	筑波大学心理学研究, 51, 35-46.	<p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>ストレスフルな体験に関する反すうおよび意味づけの内容とそれらの関連性を検討するため、場面想定法（調査1）および回顧法（調査2）による質問紙調査から得られた自由記述回答をカテゴリ分類した。その結果、反すうは出来事の光景・場面や当時の感情などの14カテゴリ、意味づけは肯定的評価や学習・発見などの10カテゴリが抽出された。反すうと意味づけの関連について検討したコレスポンデンス分析では、調査1と調査2に共通した三</p>

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
7) ストレスフルな体験における意味づけ過程の精緻化	単著	2017年3月	博士学位論文（未公刊）	<p>つの関連性が示された。</p> <p>ストレスフルな体験における意味づけについて、どのような過程を経て意味生成に至るのか、その精緻化に焦点を当てた研究である。質問紙調査やwebパネル調査、横断的・縦断的面接調査など、多様な方法によって検討した。一連の研究の結果、ストレスフルな体験と積極的に向き合い反すうをすることが意味生成につながることを示された。また、認知や感情といった個人内要因だけでなく、他者との交流や新たな出来事の体験など、取り巻く環境から影響を受けることが明らかとなった。</p>
8) The role of rumination and negative affect in meaning making following stressful experiences in a Japanese sample	共著	2018年11月1日	Frontiers in Psychology, 9, 2404.	<p>共著： <u>Namiko KAMIJO</u> & Shintaro YUKAWA</p> <p>ストレスフルな体験における意味づけ過程に、ネガティブ感情が及ぼす影響を検討するため、回顧法による質問紙調査を実施した。その結果、後悔が意図的熟考を促進し、絶望や悲しみ、恐怖といった非自責的な感情が侵入的熟考を促進することが示された。また、意図的熟考が意味生成を促進し、侵入的熟考が意味生成を抑制することが示された。</p>
9) 『心理学研究』の新心理尺度作成論文に記載された尺度作成の必要性	共著	2019年	心理学研究, 90(印刷中)	<p>共著：仲嶺真・上條菜美子</p> <p>心理尺度を作成した『心理学研究』誌の論文をレビューし、これらの論文に新しく心理尺度を作成する必要性が記載されているかを検討した。15年程の間に、『心理学研究』誌において新しい心理尺度を作成した論文は計112本あった。そのうち、新</p>

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
<p>(その他)</p> <p>1. 学会等における発表</p> <p>【審査あり】</p> <p>1) Meaning making and rumination: The roles of threat evaluation and personality.</p> <p>2) Examination of meaning-making processes in stressful events: Focusing on rumination.</p> <p>3) Gender differences in the role of intrusive and deliberate ruminations on posttraumatic growth after 3.11.</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2013年8月</p> <p>2014年8月</p> <p>2016年7月</p>	<p>International Congress on Clinical and Counselling Psychology, Istanbul, Turkey</p> <p>The 28th conference of the European Health Psychology Society, Innsbruck, Austria</p> <p>31st International Congress of Psychology 2016, Yokohama, Japan</p>	<p>しい心理尺度の独自性に関わる必要性について記載している論文は約3割であった。加えて約4割の論文は定義の記載がなかった。この結果から、新しく心理尺度を作成するには定義を明記すること、および、新しい心理尺度が既存の心理尺度とどのような類似点あるいは相違点があるかを明記することが提案された。</p> <p>共著：Kamijo, N., Yukawa, S. ストレスフルな体験における意味づけは、その体験によって繰り返し考える反すうが促進要因となりうることが示された。</p> <p>共著：Kamijo, N., Yukawa, S. ストレスフルな体験後に、積極的に意味探索を行った者は肯定的な意味を見つけやすい一方で、調査時点においても侵入的な反すうが頻繁に起こる者は、意味を見出しているにもかかわらず、その内容が否定的であることが示された。</p> <p>共著：Kamijo, N., Taku, K., Yukawa, S. ストレスフルな体験における反すうの頻度を測定する Event Related Rumination Inventory の日本語版を因子分析し、原版との比較を行った。その結果、因子構造が同じであることが確認された。</p>

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
4) Meaning making and rumination following stressful events: Relations with negative affect.	共著	2017年3月	International Conference on Spirituality and Psychology 2017, Bangkok, Thailand	共著：Kamijo, N., Yukawa, S. ネガティブ感情がストレスフルな体験における意味づけに及ぼす影響について検討した。その結果、後悔が積極的な意味探索を促し、意味生成につながることが示された。
【審査なし】 1) 大学生アスリートの試合満足度評価—制御焦点と競技不安に着目して—	共著	2012年11月	日本社会心理学会第53回大会, つくば国際会議場	共著：上條菜美子・湯川進太郎 アスリートの競技パフォーマンスに対する満足度と、制御焦点ならびに競技不安との関係性について検討した。その結果、促進焦点と防止焦点の両方の動機づけが高いことが、競技不安を低くし、試合に対する満足感を高めることが示された。
2) ストレスフルな出来事の特徴と意味づけ動機—場面想定法を用いた基礎的検討—	共著	2013年9月	日本心理学会第77回大会, 札幌コンベンションセンター	共著：上條菜美子・湯川進太郎 様々なストレスフルな場면을対象に、意味づけがどのような要因に影響を受けるのかについて検討した。その結果、未然防止性、生起可能性、不快感が高いとき、意味づけ動機が高くなることが示唆された。
3) ストレスフルな体験に対する意味づけと反すう—脅威評価と個人特性に着目して—	共著	2013年11月	日本社会心理学会第54回大会, 沖縄国際大学	共著：上條菜美子・湯川進太郎 ストレスフルな体験に対する意味づけおよび反すうを規定する要因を検討した。その結果、ストレスフルな体験に対する脅威評価は意味づけを抑制するが、反すうを介することで、意味づけが促進されることが示された。
4) ストレスフルな体験の意味づけにおける	共著	2014年7月	日本社会心理学会第55回大会, 北海道大学札幌	共著：上條菜美子・湯川進太郎 意味づけ過程における侵襲的熟考およ

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
る侵入的熟考と意図 的熟考			キャンパス	び意図的熟考の機能について検討した。その結果、体験当時に意図的熟考をすることで、成長感につながる肯定的な意味が生成されやすく、一定の時間が経過しても侵入的熟考が高い場合は、否定的な意味生成が促進されることが示された。
5) ストレスフルな体験の反すうと意味づけに関する質的検討	共著	2014年9月	日本心理学会第78回大会、同志社大学今出川キャンパス	共著：上條菜美子・湯川進太郎 ストレスフルな体験に関する反すうおよび意味づけの内容とそれらの関連性を検討するため、質問紙調査から得られた自由記述回答をカテゴリ分類した。コレスポネデンス分析の結果、生成された意味と反すうの間に3つの特徴的な関連が示された。
6) ネガティブ感情がストレスフルな体験の意味づけに及ぼす影響—多様なストレス場面を用いて—	共著	2015年9月	日本心理学会第79回大会、名古屋国際会議場	共著：上條菜美子・湯川進太郎 場面想定法により、ストレスフルな体験の後に生起するネガティブ感情が意味づけ過程に及ぼす影響を検討した。その結果、4つの出来事に共通して、(1)後悔などの悔恨感情から意図的熟考、意図的熟考から意味づけに正のパス、(2)絶望などの落胆感情から脅威評価、脅威評価から侵入的熟考に正のパスが確認された。
7) 意味づけ過程におけるネガティブ感情と反すうの関連	共著	2015年10月	日本社会心理学会第56回大会、東京女子大学	共著：上條菜美子・湯川進太郎 回顧法により、ストレスフルな体験の後に生起するネガティブ感情が意味づけ過程に及ぼす影響を検討した。その結果、後悔が意図的熟考を促進し、絶望や悲しみ、恐怖といった非自責的な感情が侵入的熟考を促進することが示された。

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
8) ストレスフルな体験の意味づけに関する縦断的検討	共著	2016年9月	日本社会心理学会第57回大会, 関西学院大学	共著：上條菜美子・湯川進太郎 ストレスフルな体験における意味づけ過程について、縦断的な変化を検討するため、計3回の縦断面接調査を実施した。その結果、時間が経過することで侵入的熟考および意図的熟考の意味づけに及ぼす影響が変化することが示された。
9) ストレスフルな体験における意味づけ過程の精緻化（小講演）	単著	2017年9月	日本心理学会第81回大会, 久留米シティプラザ	発表：上條菜美子・司会者：湯川進太郎 人は、親しい人との別れや病の罹患、人間関係での葛藤など、大きな困難に直面する。このとき、その出来事が起きた意味を探索し、自分なりの理解や解釈を与える意味づけを行うことで、その体験の克服や受容に至りやすいことが明らかになっている。従来の研究では、意味づけが心身に及ぼす効果が主に検討され、どのようにして意味を見出しているのか、意味づけの過程については十分に検討されてこなかった。そこで講演者は、認知・感情・環境の観点から意味づけ過程を精緻化し、意味づけを促進、または抑制する要因を明らかにすることを目指した。一連の研究から、(1) ストレスフルな体験に対して積極的に向き合い意味を探索すること、(2) 当時の行動を反省し改善するなど、その体験の中で自分にとって制御可能である側面に目を向けること、(3) 新たな体験をし他者との関わりを持つ環境に身を置くことが、意味づけを促進する要因となることが示された。
10) 構成概念宏大無辺 構成概念の乱立解消 に向けて	共著	2017年9月	日本心理学会第81回大会, 久留米シティプラザ	共著：仲嶺真・上條菜美子 構成概念は「心」を捉えることそのものに近い。構成概念が生まれることは、「心」

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
				<p>の新しい側面を捉えることでもあり、研究の発展や「心」の理解にとって有意義である一方、構成概念の性質と用法に対する無関心は、無意味な言説や無意味な研究の源泉ともなる（渡邊, 1995）。構成概念を生み出すことには十分な注意が必要であろう。そこで、本研究では、心理学研究に掲載された過去 5 年の論文のうち、尺度作成を目的とした論文を対象に、3つの観点からみた「必要性」が述べられている論文がどの程度存在するかを検討した。その結果、新しい心理尺度（構成概念）は年を追って増加しており、なぜその心理尺度（構成概念）が必要であるかは、部分的にしか述べられていないことが明らかになった。</p>
11) 意味づけ過程におけるソーシャル・サポートの役割	共著	2017年10月	日本社会心理学会第58回大会, 広島大学	<p>共著：上條菜美子・湯川進太郎</p> <p>回顧法により、サポートの受領がストレスフルな体験の意味づけ過程に及ぼす影響を検討し、加えて、意味づけを促す外的要因（きっかけ）の整理を行った。その結果、意図的熟考とは独立して、ソーシャル・サポートが意味生成を促進することが示された。また、他者からの言葉や他者との会話、サポートの気づきなど、他者との相互作用やサポートが意味生成を導くことが示された。加えて、新たな人間関係の構築など、人間関係を広げることが意味生成に結びつくことも示された。</p>
12) 本学会誌における新しい心理尺度を作る理由	共著	2018年8月	日本パーソナリティ心理学会第27回大会, 立命館大学	<p>共著：上條菜美子・仲嶺真</p> <p>シンポジウム「心理尺度」「説明・原因の種類」「主客」の観点から考える「パーソナリティを捉えるということ」の話題提</p>

著書、学術論文の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
13) 新しく心理尺度を 作成する「必要性」 — 『教育心理学研究』 誌および『パーソナリ ティ研究』誌を対象と した調査 —	共著	2018年9月	日本心理学会第82回大 会，仙台国際センター	供者として登壇 共著：仲嶺真・ <u>上條菜美子</u>
14) ストレスフルな体 験における意味づけ のネットワーク的解 釈の検討	単著	2018年11月	日本質的心理学会第15 回大会，名桜大学	